「問い」が生まれる授業のポイント（道徳科）

道徳科の指導においては、子供一人一人が道徳的諸価値についての理解を基に、自己を見つめ、物事を多面的･多角的に考え、道徳的価値や人間としての生き方について自覚を深めることで道徳性を養うという特質を十分考慮し、それに応じた学習指導過程や指導方法を工夫することが大切です。

道徳科の学習指導過程には、特に決められた形式はありませんが、一般的には導入、展開、終末の各段階を設定することが広く行われています。このような指導を基本としますが、以下に示された各段階の指導を全て行えばよいというわけではありません。学級の実態、指導内容や教師の指導の意図、教材の効果的な活用などに合わせて弾力的に扱うなど、各段階で多様な工夫をすることが大切です。

導入

内容項目への働きかけ（気づき・「問い」）

子供たちの生活体験との関わりを基に気づきや「問い」を引き出す

導入ではこれまでの生活体験との関わりを大切にし、子供の気づきや「問い」を引き出す手立てを工夫しましょう。よりよい気づきや「問い」が１時間の学習の充実に大きく影響します。

問題把握（学びの方向性）

本時に考えたいことを焦点化し、方向づける

主題に対する興味･関心を高めるための発問を行い、１単位時間にクラス全体で考えたいことを焦点化し、子供が主体的に主題に関わる意識を持たせるようにしましょう。

展開

教材との対話（範読）

教材を基に自分事として受け止めさせる

焦点化された問題を基に教材に描かれている道徳的価値にふれさせることができるよう、自分の価値観と照らし合わせながら範読したりＣＤを聞かせたりすることが大切です。

自分との対話（自己を見つめる）

基本･中心発問等を基に自分の考えを整理する時間を確保する

ねらいの根底にある道徳的価値の理解を基に自己を見つめる段階です。

児童生徒の実態と教材の特質をおさえた発問をし、児童生徒の一人一人の感じ方、考え方を育むようにしましょう。

自己の考えを基に他者と交流する場面を設定する

児童生徒の道徳的価値に対する感じ方や考え方を生かし、他者との対話を行いながら、物事を多面的･多角的に考えられるようにしましょう。その際、ペア、グループ、全体等、様々な形態で話し合う場面をつくりましょう。

新たに生まれた「問い」や問い返しにより、自分の考えを再整理させる

物事を多面的･多角的に考えたことにより生じた疑問、教師の問い返し等を生かしながら、子供に改めて考えさせる場面をつくり、感じ方や考え方を深めていきましょう。

他者との対話（多面的・多角的な考え）

多面的・多角的な見方へと発展した自己の考えで、他者と再交流させる

子供の新たに気付いたことや問題などから、自己や人としての生き方について考えを深めたり、交流したり議論したり、整理したりしながら、主題が明瞭になる学習を心がけましょう。

終末

振り返り（自己の考えを深める）

内容項目について学んだことを整理させる

終末では、ねらいの根底にある道徳的価値に対する思いや考えをまとめたり、道徳的価値を実現することの難しさなどを確認したりして、今後の学びにつなげましょう。

振り返りの共有（新たな「問い」）

自分の考えを深めさせ、新たな「問い」につなげる

子供たち一人一人が感じ、考え、整理したことを共有させ、互いを認め、励まし、それぞれの成長を実感させるようにしましょう。

※問題解決的な学習や自我関与、体験的な活動など様々な指導方法を組み合わせましょう。

「考え、議論する道徳」において、「自分事」として捉え、多面的・多角的に考えることを大切にし、深い学びとなる授業を目指しましょう

道徳科においては、道徳的諸価値についての理解を基に、自己を見つめ、物事を多面的・多角的に考え、自己や人間としての生き方を考え深める学習が求められます。それは、自ら「問い」を持ち、他者と関わりながら「問い」が生まれ、自分の考えを深め、振り返りを通して新たな「問い」をもつ、という学力向上推進プロジェクト＜方策１＞の考えそのものだといえます。以下の多様な指導方法（イメージ）を基に「問い」を生かした授業実践を積み上げていきましょう。

【道徳科における質の高い多様な指導方法について（イメージ）】

「自我関与が中心の学習」

教材の登場人物の判断や心情を自分との関わりで多面的・多角的に考えることを通して、道徳的諸価値の理解を深める。

期待される効果

登場人物に自分を投影して、その判断や心情を考えることにより、道徳的価値の理解を深めることができます。

発問の例
- どうして主人公は〇〇という行動をとることができたのでしょう。
(できなかったのでしょう)
- 主人公はどういう思いを持って△△という判断をしたのでしょう。
- 自分だったら主人公のように考え、行動することができるでしょうか。

留意点
- 教師に明確な主題設定がなく、指導観に基づく発問でなければ、「登場人物の心情理解のみの指導」になりかねない。

「問題解決的な学習」

問題解決的な学習を通して、道徳的な問題を多面的・多角的に考え、児童生徒一人一人が生きる上で出会う様々な問題や課題を主体的に解決するために必要な資質・能力を養う。

期待される効果

問題場面について生徒の考えの根拠を問う発問や、問題場面を実際の自分に当てはめて考えてみることを促す発問、問題場面における道徳的価値の意味を考えさせる発問などによって、道徳的価値を実現するための資質・能力を養うことができます。

発問の例
- ここでは何が問題となっていますか。
- 何と何で迷っていますか。
- なぜ、□□（道徳的諸価値）は大切なのでしょう。
- どうすれば□□（道徳的諸価値）が実現できるのでしょう。
- 同じ場面に出会ったら自分ならどう行動するでしょう。
- なぜ、自分はそのように行動するのでしょう。
- よりよい解決方法にはどのようなものが考えられるでしょう。

留意点
- 明確なテーマのもと、多面的・多角的な思考を促す「問い」が設定されているか、その問いの設定を可能とする教材が選択されているかといった検討や準備がなければ、「単なる『話合い』の時間」になりかねない。

「体験的な学習」

役割演技や動作化などの疑似体験的な表現活動を通して、道徳的諸価値の理解を深め、様々な課題や問題を主体的に解決するために必要な資質・能力を養う。

期待される効果

問題場面を実際に体験してみること、また、それに対して自分ならどういう行動をとるかという問題解決のための役割演技を通して、道徳的価値を実現するための資質・能力を養うことができます。

役割演技や体験的な活動の実施の例
- ペアやグループをつくり、実際の問題場面を役割演技で再現し、登場人物の葛藤などを理解する。
- 実際に問題場面を設定し、道徳的行為を体験し、その行為をすることの難しさなどを理解する。

留意点
- 明確なテーマのもと、心情と行為の齟齬や葛藤を意識化させ、多面的・多角的な思考を促す問題場面が設定されているか、その問題場面の設定を可能とする教材が選択されているかといった検討や準備がなければ「主題設定の不十分な生徒指導・生活指導」になりかねない。